

宮脇檀の住宅地設計の思想

小川 正人¹・高尾 忠志²・樋口 明彦³・榎本 碧⁴

¹学生会員 九州大学大学院工学府都市環境システム工学専攻(〒819-0395 福岡市西区元岡744)
E-mail:masato@doc.kyushu-u.ac.jp

²正会員 博(工) 九州大学大学院工学研究院環境社会部門(〒819-0395 福岡市西区元岡744)
E-mail:takao@doc.kyushu-u.ac.jp

³正会員 D.Des. 九州大学大学院工学研究院環境社会部門(〒819-0395 福岡市西区元岡744)
E-mail:higuchi@doc.kyushu-u.ac.jp

⁴正会員 工修 九州大学大学院工学研究院環境社会部門(〒819-0395 福岡市西区元岡744)
E-mail:midori@doc.kyushu-u.ac.jp

住宅作家として知られる建築家宮脇檀は住宅地設計にも携わり62の事例を残している。本研究では宮脇の住宅地設計の思想を明らかにするため、まず、宮脇が住宅地設計に携わるまでの経験を整理し、それらの経験により形成された街並みへの意識を読み解いた。次に、事例分析により住宅地設計手法の変遷を追った。最後に、宮脇が持っていた住宅地計画・設計の思想を分析した。その結果、宮脇は住宅地を設計・計画するにあたって、「人のための空間を作る」「日本らしい街並みを作る」「集まれる場所を作る」「時間に育まれる場所を作る」という4つの設計思想を確立したことを明らかにした。

Key Words : 宮脇檀, 住宅地設計, コモン, 街並み

1. はじめに

(1) 背景と目的

宮脇檀(1936~1998)は、1970年代後半から活躍した建築家で、特に住宅作家として社会的評価が高く、モダニズム建築の時代にあって住民の生活を見つめた設計が評価されている。その一方、宮脇は戸建て住宅地の設計にも携わっており、全国に62の事例を残した。

宮脇に関する研究には、住宅の設計思想に関する研究¹⁾が多数存在し、住宅地を住民アンケート等により事後評価した研究²⁾、住宅地の住環境マネジメントに関する研究³⁾等、住宅地に関する研究が少数ながら存在している。しかし、宮脇による住宅地の計画、設計の考え方を対象とした研究はない。

本研究は、住宅地における宮脇の計画や設計の考え方を明らかにして、これまでの住宅を中心とした建築家・宮脇檀に対する評価研究に、新しい知見を与えることを目的としている。

(2) 研究方法

本研究では、宮脇や宮脇の学生時代の指導教官であった吉村順三、高山英華に関する文献を調査することにより住宅地設計に携わるまでの経験を整理し、さらにそれ

らの経験により形成された都市への意識を明らかにする。その後、宮脇の住宅地事例から7事例を選定し、平面図、現地調査、ヒアリング調査、事例に関する文献調査を行い、宮脇の住宅地設計手法が成立する過程を明らかにした。ヒアリング調査はかつて宮脇建築研究所職員で住宅地設計を担当していた方を対象とした。最後に、以上の内容と宮脇の文献を踏まえ、宮脇が持っていた住宅地計画・設計の思想を分析した。

2. 宮脇の街並みに対する意識の形成

宮脇が住宅地の計画・設計に初めて携わったのは40歳のときであった。当然、それまでの宮脇の経験やその中で培われた考え方がその後の62の住宅地設計のベースとなっていたであろう。ここでは初めて住宅地設計に携わるまでの宮脇の人生を追いながら、宮脇がどのような考えを持って住宅地設計に携わるようになったのかを明らかにする。

(1) 家庭からの影響

宮脇は昭和11(1936)年に名古屋市に生まれた。当時、父親は画家をしながら学校の教師をしており、母親は後

にアプリケ作家として知られるようになる。父親とともにデッサンをしていた経験の影響について、後に宮脇は「考えるよりも先に手が動いて後から頭が追いついてくる」と語っている⁴⁾。

終戦を迎え、宮脇はアメリカ人将校の肖像画を描いた際に大変喜ばれた関係で、アメリカの雑誌を入手できるようになり、それらに掲載されていたアメリカの美しい工業製品をみて、デザインに興味を持つようになった⁵⁾。

そして、宮脇が高校3年のとき、宮脇の父親が学校に講演に来た柳宗理に対しデザインをするための進路に助言を求めた際に、柳宗理が「芸大の建築科に行きなさい」とアドバイスしたため芸大の建築科に進学することとなったと言う⁶⁾。

(2) 恩師・吉村順三の影響

日本が高度経済成長期に入っていく昭和30(1955)年に宮脇は東京藝術大学建築科に入学する。そこで特に宮脇に大きな影響を与えたのは吉村順三であった。

吉村は日本的な建築を残した建築家として知られている⁷⁾。吉村は朝鮮やヨーロッパへ旅行をして、他の国の建築を見た経験から、建築はその土地で生まれ、成り立つものであるという考えを持っていた⁸⁾。それに加え、吉村はアントニオ・レーモンドの建築事務所に勤務し、レーモンドに同行して渡米した際、海外で生活することにより外から日本を見たため、日本の建築の良さを再発見したとも述べている⁹⁾。

吉村は、宮脇が東京藝大に入学した前年の昭和29(1954)年にはニューヨーク近代美術館の中庭に展示する日本建築を設計しており¹⁰⁾、それ以降国内外から注目を集めるようになった¹¹⁾。吉村は、モダニズムに日本様式を取り入れた建築と、建物の中で生活をする人間を中心に考えた設計をする特徴をもった建築家であった¹²⁾。

以上からわかるように、宮脇が大学に入学する時期には、吉村は日本には日本的な建築がふさわしいということや、生活者のための空間を作るべきだといった考え方を確立しており、社会からも認められた建築家であった。宮脇は「私にとっては卒業後の長い間の私を支配してしまう強さをもっている吉村先生が、やはり私の生涯の師なのであろう」と語り、吉村順三が自らに大きな影響を与えたことを認めている¹³⁾。

(3) 都市計画に対する意識の醸成

宮脇は、東京芸術大学卒業後、東京大学大学院建築学科に進学し、都市計画を専門とする高山英華の研究室に進学する。

高山は、当時より都市には建築や、道路、鉄道、上下水道などの要素が関係しあって成り立っているため、総

合的に見る視点が必要だと考えていた。宮脇は後に住宅地の設計の際には行政と全ての業者が協働することが必要であると指摘しているおり¹⁴⁾、高山の影響があったのではないかと考えられる。

また、宮脇は後に静岡駅前商店街再開発や真駒内住宅地計画等の都市計画に関わったが、都市計画における生活や空間に対する「リアリティ」の欠如、都市計画の実現性の低さに対し疑問を持っていたようである。こうした宮脇の考え方にも、吉村の影響を見て取ることが出来る。

(4) 街並みの「日本らしさ」に対する理解

宮脇は大学院の時に日本一周の旅をしており、その道中に見た各地方の集落から日本の集落特有の美しさがあることを発見したと言う¹⁵⁾。また、宮脇は修士一年の時に残した論文¹⁶⁾で飛騨高山の景観を分析し、日本らしい街並みにおける景観形成の要素について考察している。宮脇は、学生時代から日本の集落の美しさがどういった要素から成り立っているのかを検証しようとしていた。

宮脇は建築事務所を設立した昭和39(1964)年に法政大学の講師に就任し、3年目の昭和41(1966)年から8年間で9箇所にわたる集落調査(デザイン・サーベイ)を行った¹⁷⁾。対象地は倉敷、馬籠、南古萩町、五個荘、琴平、稗田、室津、丹波篠山、平福であった。サーベイは、集落の構造と景観を分析するための客観的資料の作成を目的としており、集落が与える感動を客観的で実証的に解明することが出来るように工夫されていた¹⁸⁾。そして、宮脇は、そのデザイン・サーベイの中で、日本らしい街並みは「統一感」とともに「多様性」を持っていることにより成り立っていることを発見した。

宮脇は、「松川ボックス」等の代表作にみられるように、住宅単体の設計においては、周囲の環境から切り離れたデザインをすすめていたが、昭和51(1976)年の秋田相互銀行角館支店の設計から、周囲の街並みとの調和を考えるようになったと言う¹⁹⁾。

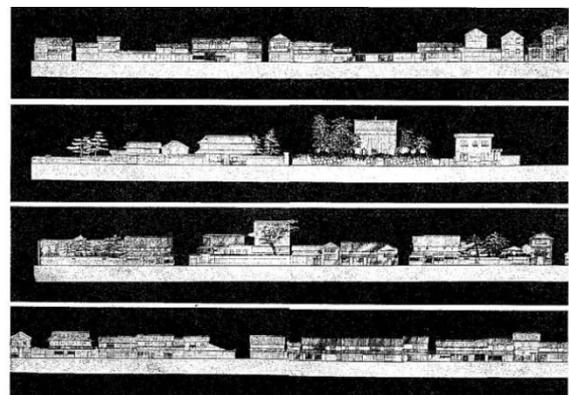


図1 宮脇チームが作図した倉敷の立面図²⁰⁾

表-1 住宅地設計に携わるまでの宮脇の経歴

年代	経歴	宮脇が受けた影響	当時に振り返った宮脇の言葉
1955 1959	東京藝術大学 (吉村順三に師事)	<ul style="list-style-type: none"> ・建築に関わるようになる ・リアリティのあるものづくりに対する意識の形成 	「僕は数多い吉村ディテールの中から建築と人間に対する愛情、こまやかさの大事さをどれくらい学んだらろうか ²¹⁾ 」
1959 1961	東京大学大学院 (高山英華に師事)	<ul style="list-style-type: none"> ・都市計画の経験 ・都市計画の手法への疑問 ・様々な要素を総合的に考える思考の醸成 	「都市計画とは交通網計画に用途地域をぶっ掛ければおしまいで、後は色を塗ってパースをかくて、最後にレポートを書いちゃうというやつです。あのへんのリアリティの薄さというのは、何か物を作っていく人間にはすごくいやだったんです ²²⁾ 」
1961 1964	朝吹建築事務所		
1966 1973	日本各地の集落について デザイン・サーベイ (倉敷, 馬籠, 南古萩, 五箇荘, 琴平, 稗田, 室津, 丹波篠山, 平福)	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の美しい街並みの形成条件の解明 ・周囲と調和した建築の設計への意識の始まり 	「それまでは、掃きだめに鶴が単体として降りて来るなんて思っていたんですが隣と並べたときにどういう問題が起きるかということを考えはじめたのはその辺からだと思います ²³⁾ 」
1971 	ボックスシリーズ	<ul style="list-style-type: none"> ・都市に関する問題意識に対する建築家としての答え ・松川ボックスで建築学会賞受賞 	「ボックスが外界から切り離され、断絶した内部空間を獲得しようという姿勢であったのは、外部空間の悪化に対する逃げの姿勢からであった。ひたすらに内にもり内部に完結した空間を求めていた ²⁴⁾ 」
1977	住宅地設計開始	次章で取り扱う	

3. 宮脇の住宅地計画・設計手法の変遷

ここでは、宮脇の住宅地計画・設計手法が確立された過程を明らかにするために、宮脇の携わった62の住宅地の中から、彼の住宅地計画・設計の考え方や手法がよく読み取れる7事例を時系列順に分析する。

(1) コモンライフおさゆき

これは宮脇が初めて住宅地設計に携わった事例である。宮脇40歳にして初めての試みであった。この事業では計画が決定し、宅地造成が進む状況から、開発業者の積水ハウスからアドバイスを求められた²⁵⁾。宮脇はそれまで住宅地設計に携わったことはなかったが、宮脇と積水ハウスの会長が顔見知りであったことから声が掛かったと言う²⁶⁾。宮脇は生垣の緑を連続させることが統一感

のある街並みをつくるために必要だと考え、外構の統一と門扉の後退という工夫を取り入れた²⁷⁾。



写真1 おさゆきの外構と二重生垣 (筆者撮影)

(2) 高須ボンエルフ

これは宮脇が関わった8つ目の事例であるが、住宅地に住む人間にとって使いやすい道路の設計を目指していた宮脇はここで初めてボンエルフ道路を導入した。

この事例も街区形状が決まった段階での参加であった²⁸⁾。対象街区内にボンエルフ道路とコモン広場を作ることで、宅地の造成と、生活空間としての道路の設計を両立した。一次造成が出来上がった街区を一般的な宅地の大きさと分割したところ中央に区間ができてしまったため宮脇は苦肉の策としてコモンを導入したと述べている²⁹⁾。



写真2 高須のコモンとボンエルフ道路（筆者撮影）

またここでは、外構の統一を徹底するため、二重生垣に加え、門扉の後退幅を大きくし、さらに門扉、門灯、外構の素材も統一したものとした。また、駐車場を裏側のコモンに配置することにより、外周道路側の連続性を向上させた。コモン広場は、駐車場と一体的に整備され、家の裏にあるコモン及び駐車場にアクセスしやすいよう出入口を配置するなど利用を考えた工夫がなされている。

(3) 高幡鹿島台ガーデン54

これは、宮脇の18番目の住宅地設計の事例であり、鹿島建設の社宅跡地の再開発事業であった³⁰⁾。計画段階から関わり、設計の自由度が高い事例であった³¹⁾。

この事例では、住宅地内の外構とイメージハンプの素材を統一し、カーポートのゲートを同一のデザインにして住宅地全体として統一感を出している。また、道路については疑似歩道を設け、道路内へ樹木を配置する等して、住宅地の道路全体がボンエルフ道路としてデザインされている。加えて街区内には宅地の間を通り道路と道路を結ぶフットパスも設計されている。デザインにより統一感のある街並みを形成するその一方で、住宅地内での多様な景観を楽しむため歩行者の目に映る景色を想

定するなど、道が歩行者が主役となるようにデザインされている。



写真3 ガーデン54の外構及び疑似歩道（筆者撮影）

(4) 明野ボンエルフ

これは宮脇の22番目の住宅地設計の事例である。この事例では、遠くの美しい山並みを眺めることができるように道が設計されている³²⁾。道路を生活空間としてつくると同時に、住宅地内のシークエンスの変化により様々な風景を楽しませる装置とした。街並みの構成要素を統一することに加えて、その住宅地内から見ることのできる風景には多様性を持たせることにより、日本の集落の有り方から学んだ、統一感と多様性の両立を図っていると考えられる。

加えて、この明野ボンエルフでは、3~7軒の住宅により囲まれたコモンをボンエルフ道路でつなぐことにより住宅地全体が構成されている。このようにコモンが形成されているものを、ここでは「クラスター型コモン」と呼ぶ。この事例は、クラスター型コモンを導入した初めての住宅地である。

(5) 青葉台ボンエルフ

この事業では、道路と宅地造成に関する設計を行っており、高須ボンエルフの問題点を踏まえての設計となった³³⁾。これは宮脇の45番目の事例である。

ここでは、13のコモンにより「クラスター型コモン」が構成され、コモンごとにそれぞれ名前とコモンツリーが決められている等の工夫がされている。

さらに、駐車スペースとコモンの舗装がそろえられ、建築の屋向きはコモンに向けられ、さらに各住宅のアプローチもコモン側に置き、コモンを囲ませようとする意識が高くなっていることが分かる。

道路は街区内をループ状に結ぶ1本の集散道路以外は全てボンエルフとなっており、ボンエルフ道路はコモンの舗装と同一になっている。コモン入口の樹木や統一された舗装により住宅地全体が豊かな歩行者空間となっている。なお、集散道路はアスファルト舗装であるが、コ

モンの入口部分ではイメージハンプとが整備されており、歩行者優先が意識されていることがわかる。



写真4 青葉台ボンエルフのコモンツリーとコモン（筆者撮影）

(6) 諏訪野

宮脇が携わった住宅地の47番目の事例である。コモンを導入した住宅地として、最大規模の宅地開発である。ここでは、地区内幹線道路から入り、細街路、コモンへ繋がるボンエルフ道路で構成されている。また、コモン入口にフォルトを設置することや、コモン入口にゲート性を持たせた植樹をすることにより、歩行者中心の道路空間を作っている。

この事業で宮脇は、門扉や門柱、表札であるとか、家の形や外壁などは、できる限りフリーにしようと提唱しており³⁴⁾、この事例でも統一感とともに多様性も実現しようとしていることが伺える³⁵⁾。

また、この事業で宮脇は、コモンの持つ効用として、良質なオープンスペースが確保されること、住宅の居住環境を高めること、子供の遊び場となること、向こう3軒両隣のコミュニティの舞台となることを挙げており³⁶⁾、コモンの持つ役割が発展してきていることが伺える。

(7) フォレストージ高幡鹿島台

これは、宮脇の61番目の住宅地設計の事例である。この事業は(3)で述べた高幡鹿島台ガーデン54の隣の地区で、ガーデン54との関係性についてはよく考慮する必要があった³⁷⁾。隣のガーデン54の人工的なデザインに対し、自然な印象を与えるような設計になっており、舗装を自然石としたり、道路に曲線が用いられたりしている。

ここで取り入れられている、クラスター型に配置されたコモンとコモンを繋ぐ道路について、当時の担当者はヒアリングで以下のように語っている³⁸⁾。

ひとつのコミュニティを形成しているコモンは、ボンエルフ道路や歩行者専用道路によって相互に結ばれて、歩行者が

快適に歩けるようなネットワークを形成している。

つまり、宮脇は、ひとつひとつのコモンにおけるコミュニティの形成にとどまらず、コモン同士のアクセスを向上させることによって、住宅地全体のコミュニティの形成も促進することを狙っていたのではないかと考えられる。



写真5 フォレストージ高幡鹿島台のコモンとコモン間をつなぐ街路（筆者撮影）

(8) 宮脇の住宅地設計手法の確立

宮脇が最初に携わった住宅地「コモンライフおさゆき」では、統一した街並みをつくるために外構を統一し、門扉を後退させている。さらに、ボンエルフ道路を設計し歩行者と自動車の共存を図った。

「高須ボンエルフ」では、不整形な宅地条件から苦肉の策としてコモンを取り入れた。しかし、後にそのコモンがコミュニティの形成に貢献していることに気づき、その後コモンを積極的に取り入れるようになった。やがてコモンという設計手法は、住宅地を形成する他の要素と有機的な関係を持つものへと洗練され、「クラスター型コモン」へと発展した。

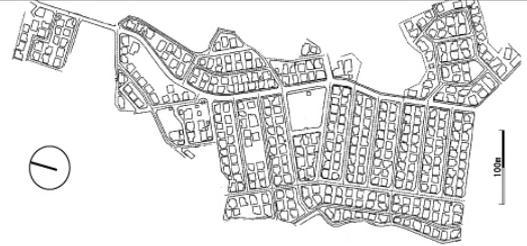
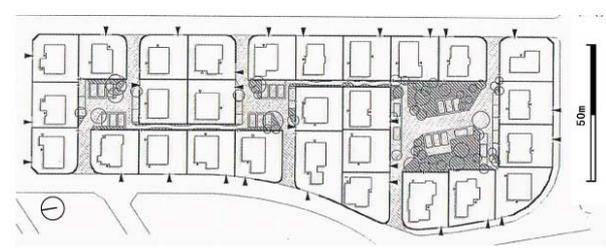
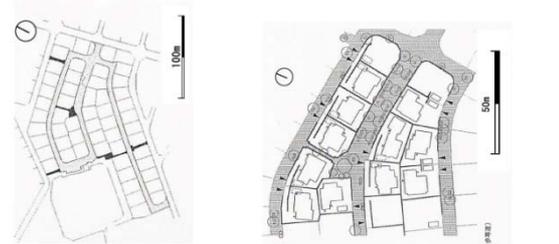
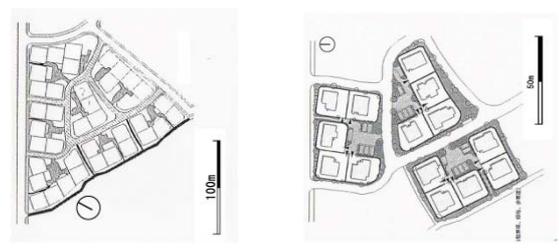
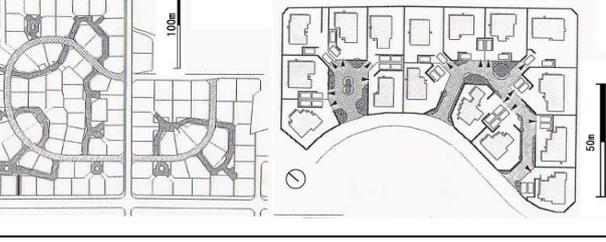
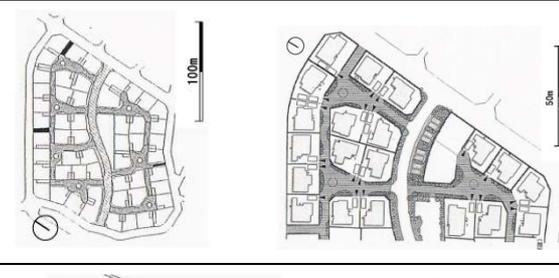
それに加え、宮脇は、各事例において維持管理や建替えに関する管理計画を策定している。

このようにして試行錯誤しながら確立されてきた宮脇の住宅地の設計手法について、宮脇は「5つのハードと1つのソフト」として提唱している³⁹⁾。「5つのハード」とは造成計画、施設計画、外構計画、宅地内計画、建物計画であり、「1つのソフト」とは管理計画である。そして、宮脇は、これらの要素を総合的に考え、整備することが重要であると指摘している⁴⁰⁾。

4. 宮脇の住宅地設計の思想

以上までに述べてきたように、宮脇は、両親や吉村、高山等の影響とデザイン・サーベイ等の経験から、日本

表-2 宮脇の住宅地設計手法の変遷

概要	コモンライフおさゆき	高須ボンエルフ	高橋鹿島ガガーデン 54	明野ボンエルフ	青葉台ボンエルフ	諏訪野	フォレストエーゼン高橋鹿島台
設計の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・統一外構 	<ul style="list-style-type: none"> ・統一外構 ・ボンエルフ道路 ・裏の空間としてのコモン 	<ul style="list-style-type: none"> ・統一外構 ・全道路ボンエルフ ・小規模コモン ・疑似歩道，道路内植栽 	<ul style="list-style-type: none"> ・統一外構 ・ボンエルフ道路 ・クラスター型コモン 	<ul style="list-style-type: none"> ・統一外構 ・ボンエルフ道路 ・クラスター型コモン ・ループ状集散道路 	<ul style="list-style-type: none"> ・統一外構 ・ボンエルフ道路 ・クラスター型コモン ・集散道路のボンエルフ化 	<ul style="list-style-type: none"> ・統一外構 ・ボンエルフ道路 ・クラスター型コモン ・コモン間に街区道路
コモンの作られ方	 <ul style="list-style-type: none"> ・コモンなし 	 <ul style="list-style-type: none"> ・住宅の入り口は外周道路を向いている 	 <ul style="list-style-type: none"> ・小規模なコモンを配置 	 <ul style="list-style-type: none"> ・クラスター型コモン始まり 	 <ul style="list-style-type: none"> ・個別に名前の付いたコモン ・コモンツリー配置 	 <ul style="list-style-type: none"> ・大規模住宅地におけるクラスター型コモン ・コモンツリー配置 	 <ul style="list-style-type: none"> ・自然石舗装のコモン ・コモンツリー配置

の街並みやそこでの暮らしに対する意識と理解を持つようになり、その上で住宅地の設計に関わるようになった。そして、62の事例に取り組む過程で試行錯誤しながら、街並みやコミュニティの形成を目指した住宅地設計の考え方と手法を確立するに至った。ここでは、宮脇が確立した住宅地の設計思想がどのようなものであったのかについてさらに考察を深めたい。

(1) 人のための空間を作る

宮脇は一貫して、住宅地内の道路を歩行者のための空間として設計していた。例えば、宮脇は道路計画から設計できた事業では、ほぼ全ての事例でボンエルフ道路を導入している。さらに事例を重ねるにつれてボンエルフ道路だけでなく、舗装による擬似歩道（ガーデン54）や、シークエンスを考慮した道路線形（明野ボンエルフ）等の手法も適用した。道路を生活の場として質の高いものにしながら、歩行者と車が共存できる道の設計を目指していたと言えよう。

(2) 日本らしい街並みを作る

宮脇は、街並みを統一するために外構・舗装の統一、門塀等の後退による生け垣の連続等の手法を適用している。しかし、統一するのみでは単調な街並みとなってしまう魅力は生まれぬため多様性を生み出す必要があると宮脇は考えていた。これはデザイン・サーベイから得た「日本らしい街並み」への理解の結果であったと考えられる。

多様性を生み出すために宮脇は複数の住宅地において主に3つの手法を使っている。一つが住宅地内道路におけるシークエンスによる風景の多様性を楽しむというものである。明野ボンエルフの周辺山並みを眺めつつ変化していく道のシークエンスなどが挙げられる。

二つ目は、コモンに多様性を持たせるという手法である。コモンツリーやコモンに名前をつけることでそれぞれ異なる特徴を持たせ、コモンをフットパスやボンエルフ道路で結ぶことにより、コモンを巡りながら住宅地の多様性を感じられるようにしていたのである。

三つ目は、街並みを構成する住宅に多様性をもたせることである。宮脇は、住宅地を構成する様々な要素を統一する部分と、自由にする部分を使い分け、全体として統一感と多様性のバランスを取るよう設計していた。

(3) 集まれる場所を作る

宮脇の設計した住宅地の特徴として、これまで何度も紹介してきたコモンが挙げられる。初期の段階で宮脇が意識していたコモンの役割は、駐車スペースと広場を両立することであった。

しかし、宮脇は、過去に設計した住宅地の後の利用状況を見て、「各戸の出入り口がコモンスペースに面して作られているわけですから、嫌でも皆の顔が会い、近所付き合いがはじまります」と述べて⁴¹⁾、当初は目的としていなかったコモンでのコミュニティ形成効果を発見

します。

そしてそれ以降、宮脇は、コモンが近隣の結びつきをより強くする装置となるように、屋向きや住宅のプランをコモン中心にし、コモンをクラスター型に配置し、コモン同士繋ぐことにより、住宅地全体のコミュニティ形成を促す設計をするようになった。

(4) 時間に育まれる風景を作る

住宅地は竣工されてから数十年という長期間にわたりそこに存在し、住民の生活の場となる。良好なまちなみを保つために宮脇は、管理計画により、時間を経ても良好な住環境が保たれるように仕組みを整え手立てを講じている。

皆が生活していく町や環境を守っていくのは、そこに住む人全体で行っていかなくてはならないことだ⁴²⁾。

このように述べ、宮脇は、住民に使われることにより住宅地が良好な生活空間として熟成されることを意識していたと考えられる。

5. まとめ

本研究では、宮脇が住宅地設計について持っていた基本的な考え方を明らかにした上で、宮脇がこうした考えを確立するプロセスとして、宮脇の学生時代等の経験や個別の事業での試行錯誤を時系列的に把握した。

「人のための空間を作る」という考えは、恩師・吉村の「生活者のための空間を作るべきだ」とする建築に対する考えの影響だと考えられる。また、交通計画や用途地域の設定に終始し、生活へのリアリティのない都市計画に対する挑戦であったとも言える。宮脇は、この考えの実現のために、初期は一街区のみで用いたボンエルフ道路を住宅地全体で取り入れる等の工夫をした。

「日本らしい街並みを作る」という意識は、学生時代の日本一周やデザイン・サーベイの経験のなかで日本の集落の美しさを知ったことが基盤となっていると考えられる。また、「建築はその土地で生まれ成り立つものである」という恩師・吉村の考えの影響から、日本の住宅地は日本らしいものとする考えが形作られたと考えられる。宮脇は、初期は住宅地を構成する全要素の統一を試みていたが、後期では日本の街並みの特徴である統一感と多様性のバランスを図るようになり、家並みや壁面の色彩等はある程度各住民の自由に任せるようになった。

「集まれる場所を作る」という考えについては、当初苦肉の策として取り入れたコモンが、住民のコミュニティ活動の場となっていることを発見し、積極的にコモンをとり入れるようになり、さらにコモン同士をフットパスでつなぎクラスター型のコモンへと発展させた。

「時間に育まれる場所を作る」という考えについても、

設計した住宅地の使われた方を見ることで、住民の手が加わることを想定した植栽計画や管理協定を結ぶなどの工夫がなされるようになった。

こうした宮脇の住宅地設計に関する考えを住宅設計と比較して評価してみると、住宅では屋内空間や家族を対象としていた「人のための空間を作る」「集まれる場所を作る」という考えが、住宅地では屋外（公共）空間とコミュニティを対象としていたことがわかった。

また、「日本らしい街並みを作る」という点については、代表作である松川ボックス等との比較からわかるように、意識としては共通していながら、表現としては逆の方法をとっていたことがわかった。また、「時間に育まれる場所を作る」という考えは、宮脇の住宅設計に関する評価にはみられなかった点であり、住宅地を対象とすることによって明らかになった点である。

参考文献

- 1) たとえば、隈祥平：建築家の「社会性」とは何か 宮脇檀を通して、日本建築学会九州支部研究報告、第46号、pp. 789-792, 2007
- 2) たとえば、島屋由美子：可見市桜ヶ丘ハイツにおける戸建住宅地計画に対する居住者の評価、日本建築学会東海支部研究報告、pp. 645-648, 1995
- 3) たとえば、柴田建：街並み計画型戸建て住宅地における住環境マネジメントに関する研究、日本建築学会計画系論文集、第558号、pp. 95-101, 2002
- 4) 別冊新建築 日本現代建築家シリーズ、pp. 171-172, 新建築社, 1980
- 5) 別冊新建築、p. 172, 新建築社, 1980
- 6) 別冊新建築、pp. 172-173, 新建築社, 1980
- 7) 吉村順三、六角鬼丈、中村好文、宮脇檀、藤森照信：吉村順三を囲んで、pp. 72-76, TOTO出版, 1992
- 8) 吉村順三：火と水と木の詩、pp. 45-46, 新潮社, 2008
- 9) 別冊新建築 日本現代建築家シリーズ、p. 189, 新建築社, 1983
- 10) 建築雑誌 vol. 114, p. 8, 日本建築学会, 1990
- 11) 吉村順三、六角鬼丈、中村好文、宮脇檀、藤森照信：吉村順三を囲んで、p. 115, TOTO出版, 1992
- 12) 吉村順三、六角鬼丈、中村好文、宮脇檀、藤森照信：吉村順三を囲んで、pp. 68-77, TOTO出版, 1992
- 13) 吉村順三、六角鬼丈、中村好文、宮脇檀、藤森照信：吉村順三を囲んで、p. 121, TOTO出版, 1992
- 14) 都市住宅 8月号, p. 26, 鹿島出版, 1985
- 15) 別冊新建築 日本現代建築家シリーズ、pp. 174-175, 新建築社, 1980
- 16) 別冊新建築 日本現代建築家シリーズ、pp. 175, 新建築社, 1980
- 17) 宮脇檀：日本の伝統的都市空間、pp. 7-8, 中央公論芸術出版, 2003
- 18) 宮脇檀：日本の伝統的都市空間、pp. 6-7, 中央公論芸術出版, 2003
- 19) 都市住宅 8月号, p. 25, 鹿島出版, 1985
- 20) 宮脇檀：日本の伝統的都市空間、pp. 16, 中央公論芸術出版, 2003
- 21) 吉村順三、宮脇檀：吉村順三のディテール、p. 158, 彰国社, 1979
- 22) 宮脇檀：つくる術について五人のデザイナーたちと語った、p. 63, 新建築社, 1976
- 23) 都市住宅 8月号, p. 25, 鹿島出版, 1985
- 24) ギャラリー間：宮脇檀の住宅、pp. 60-61, TOTO出版, 2000
- 25) ヒアリング調査より
- 26) ヒアリング調査より
- 27) 都市住宅 8月号, p. 47, 鹿島出版, 1985
- 28) 家とまちなみNo. 10, p. 11, 住宅生産振興財団, 1982
- 29) まちなみ大学講義録1, p. 76, 住宅生産振興財団, 1996
- 30) 宮脇檀建築研究所：コモンで街をつくる、p. 82, 丸善プラネット, 1999
- 31) 都市住宅 8月号, p. 35, 鹿島出版, 1985
- 32) 都市住宅 8月号, p. 27, 鹿島出版, 1985
- 33) 宮脇檀建築研究所：コモンで街をつくる、pp. 168, 丸善プラネット, 1999
- 34) まちなみ大学講義録1, p. 73, 住宅生産振興財団, 1996
- 35) 家とまちなみNo. 10, p. 32, 住宅生産振興財団, 1982
- 36) 家とまちなみNo. 10, p. 35, 住宅生産振興財団, 1982
- 37) 宮脇檀建築研究所：コモンで街をつくる、pp. 192, 丸善プラネット, 1999
- 38) ヒアリング調査より
- 39) 宮脇檀建築研究所：コモンで街をつくる、pp. 20-21, 丸善プラネット, 1999
- 40) 宮脇檀建築研究所：コモンで街をつくる、pp. 20-21, 丸善プラネット, 1999
- 41) まちなみ大学講義録1, p. 76, 住宅生産振興財団, 1996
- 42) 宮脇檀：都市に住みたい、p. 166, PHP研究所, 1992